

海外の日本語教師と学習者の活動に関する一考察

北欧フィンランドの事例から

小川 誉子美 (横浜国立大学)
ogawa-yoshimi-tr@ynu.ac.jp

【要約】

戦時下に開設された日本語のクラスの師弟、日本人教師桑木務と学習者ケラヴオリが、戦後、双方の文化を紹介する活動に尽力し、政府や諸団体によってその功績が讃えられた。特に、ケラヴオリの活動は日本で詳細に報じられた。本稿は、二人の活動の概略を紹介するとともに、注目されるに至った要因について、活動内容や北欧という地域の価値観が当時の日本において受け入れられやすい状況であったことを指摘し、海外の日本語クラスで出会った師弟によるその後の活動の可能性について論じるものである。

1. 目的

海外の日本語のクラスには、様々な目的を持った人々が集まる。そして、教師との出会いによって夢をかなえ、国や組織を動かす原動力になることもある。

2017年、ベトナム残留日本兵の家族がハノイで天皇皇后両陛下と面談し、その後日本兵の子どもたちの訪日を実現した。その模様は、メディアが報じ、広く知られるところとなった。第二次世界大戦後ベトナムに留まり家族を持った残留日本兵は、その後帰国を余儀なくされたが、残された家族の望みを届けようとする現地からの働きかけが日本政府に届き、子どもたちの来日がかなったのである。その発端は支援団体の代表をつとめるベトナム在住の日本人女性のある出会いであった。彼女の職業は日本語教師で、「日本人のお父さんと会ったとき日本語で話したい」と願い日本語を学ぶ一人の生徒に出会ったことからこの史実を知ったという。彼女が家族たちの気持ちに寄り添い支援団体を組織したことで、この来日を実現したのである。

もう一つの例を紹介しよう。1950年代にさかのぼる。かつての日本語学習者と日本語教師がそれぞれ、両国の文化紹介活動を長きに渡り展開し、日本のメディアが大きく報じられた時期があった。「異国の教え子から贈り物、天皇陛下には短歌集を献上」(毎日新聞 1951年 12月 21日)、「短歌俳句が大好評、ヘルシンキに高まる日本熱、ケラヴオリ女史天皇の歌集の翻訳も」(毎日新聞 1952年 4月 20日)、『日本のお話のおじいさんは語る』フィンランドの日本研究家ケ夫人の訳業」(朝日新聞 1953年 2月 16日)などが写真入りで紹介されたのは、戦時下に日本語を学んだケラヴオリの活動であった。また、彼女が1953年来日した際は、羽田空港や宿泊先での出迎えの様子から、5週間にわたる活動に至るまで報じられた(東京新聞 1953年 9月 30日)。さらに、1972年には、一連の活動が評価され、京都の都ホテルで開催された日本研究国際会議に日本ペンクラブから招聘されている。一連の活動を支えたのは、かつての日本語教師であった。この教師も、日本でのフィンランド文化の理解に貢献したことが評価され、フィンランド政府からライオン騎士賞が授与されている。

上記の二例のうち前者の例は、海外における日本語教育の現場には様々な目的で学ぶ人達が集まること、日本語クラスや日本語教師が、日本に関する情報にアクセスするための身近な窓口となり、そこには様々な思いが届けられることをあらためて気付かせてくれる。一方、後者は、日本語の教室で出会った教師と学習者が、それぞれに研鑽を重ね、元学習者は日本語の訳業や著述に取組み、元教師は赴任先の言語や文

化を日本に紹介し、政府や諸団体からその労が労われたという例である。

本稿は、後者の例を取り上げ、元学習者と元教師の活動の概要を紹介するとともに、元学習者の活動が日本のメディアで好意的に取り上げられた背景として、その内容と当時の社会がどのように作用したのかという点から論じ、海外の日本語教育の現場が持つ可能性について考察するものである。

2. 日本語学習者としてのケラヴオリ

大戦下の日本語学習者ケラヴオリは、戦後の日本の記事で「知日家」「日本研究家」として紹介されている。筆者はケラヴオリについて、孫にあたるクラウス・ケラヴオリ氏をはじめ、当時の日本公使の令息昌谷春海氏、日本語の教師であった桑木務氏の夫人桑木土思子氏、ヘルシンキ大学留学中に接点のあった百瀬宏氏へのインタビューを通じて、一定の人物像を描くことができた。本節では、それも踏まえつつ文献資料を中心に彼女の活動を紹介する¹。

2. 1 日本語学習

マルタ・ケラヴオリ (Marta Keravuori 1888～1976 年) は、第二次世界大戦中ヘルシンキ大学で開講された日本文化・日本語講座で日本語を学んだ。このクラスは、ドイツからフィンランドに渡った元日独交換学生の桑木務がドイツ語を媒介に初級日本語を教えていたもので²、ここに、ケラヴオリが参加した。当時 55 歳であった。しかし、その 3 年前から日本とは接点があった。1940 年に在フィンランド日本公使館に着任した昌谷忠公使は、従者を伴っていたが、従者であった公使の甥の要芳郎がヘルシンキ工科大学に入学する準備としてフィンランド語の知識を必要としていた。その要にフィンランド語を教えたのが、ケラヴオリであった。彼女は、小学校での教師経験と、数ヶ国の外国語教育の免状を持っていたのである。昌谷公使を通じて「日本語読本」を入手し、多少の日本語学習経験があったケラヴオリは、この桑木の日本語のクラスで優秀な成績をおさめた。しかし、1944 年 9 月に日本・フィンランド間の国交が断絶されたのに伴い、同年 11 月、桑木らに在留邦人は抑留され、シベリア鉄道で帰国の途についた。日本語講座は中断を余儀なくされたが、有志たちが日本語学習会「みなさん会」を結成し、自主的に集まって学習を続けた。「みなさん会」には、当時、反ソ活動の疑惑をもたれる中、憲兵の監視下で、天文学者、歯科医、行政官らさまざまな職業の者が十数名集まり、日本語を学んだ。この勉強会は、桑木の帰国後、1944 年 11 月 18 日から 1945 年 5 月 29 日まで、14 回にわたり継続されたが、このカリキュラムを組み最終回には参加者に修了書を渡すなど、会を牽引したのがケラヴオリであった。その後、「みなさん会」は解散したが、ケラヴオリは、戦争のため日本から一時帰国中であったルーテル派宣教師テーネ・ニエミ (Tyne Niemi) の助けを借りて日本語学習を継続し、フィンランド語で文法解説を付けた日本語学習書を作成している。

2. 2 訪日まで

ケラヴオリは、数カ国語の外国語教育の免許とともに小学校教師の経験を持ち、児童書に関心の深かった。*Aamun maan tarinoita* 『日出づる国の物語』(1950、OTAVA 書店) を出版し、桃太郎、花咲じいさん、浦島太郎、舌切り雀など昔話 20 編をフィンランド語で紹介し、*Kirsikan kukkia* 『桜の花』(1951、WSOY 書店) では、神武天皇、紀貫之から明治天皇、北原白秋にいたる作品を中心に 150 ほどの短歌や長歌、及び、俳句を紹介した。この 2 冊はケラヴオリの希望により桑木が皇室への献呈の手続きをとっている(桑木 1981: 188)。また、*Nipponin satusetä kertoo* 『日本の昔話のおじいさんは語る』(1952、OTAVA 書店) では、巖谷小波のお伽話から 8 編を選び、フィンランド語で紹介している。これらの著書について、

¹ ケラヴオリの活動については、小川誉子美 (2006) をもとに、再構成したものである。

² 桑木の着任については、小川 (2001) 小川 (2010) などを参照。

1950年11月から1953年4月の間に、あわせて35点の書評が新聞や雑誌に掲載された。そのうち20点は、和歌をフィンランドにはじめて紹介した『桜の花』に対する書評であった。評者には Kai Laitinen からフィンランドを代表する文学者も名を連ねている。

また、ケラヴオリは、フィンランド在住日本人やフィンランドを訪れる日本人に親身の世話をし、「ヘルシンキのおばさん」という愛称で親しまれるようになった。特に、1952年にヘルシンキでオリンピックが開催された折には、当地を訪問した日本の五輪関係者の多くがケラヴオリから世話を受けている。独立後間もない日本から異国に渡って国際的な集いで競う若者たちは、日本語で世話を受け、緊張が解かれたに違いない。

2. 3. 日本でのケラヴオリ

1953年、結婚40周年を祝ったケラヴオリのもとに、65歳の誕生日プレゼントとして、日本への往復航空券が届けられた。これは、かねてから訪日を夢見ていた彼女に対し、日本文化の紹介活動への労をねぎらい、好意に報いようと関係者の謝意から実現したものであった。日本語講座の恩師、桑本務やヘルシンキ五輪関係者らが発起人となったこの招聘には、日本フィンランド協会が主な出資者となり、フィンランド名誉総領事山本雅美や、東京都副知事春彦一、文部省の馬場重徳らが日本での訪問先や日程の調整に尽力するなど、多くの日本人の協力があつた。彼女の交友範囲の広さは、9月28日、羽田空港から向かった宿泊先、丸の内ホテルのロビーが出迎えの知人で埋め尽くされていたという事実からもうかがえる（東京新聞1953年9月30日）。

1ヶ月あまりの日本滞在中、文化団体や学校など、訪問の先々で歓迎会が催され、ここでも「ヘルシンキのおばさん」という愛称で迎えられた。歓迎会ではスピーチを行い、また記念品が贈られることもあつた。主な歓迎行事や訪問先は以下のようなものである。

10月2日、フィンランドの総領事 Regnar Smedflund により、松平ホテル（現東京プリンスホテル）にてケラヴオリ歓迎のレセプションがもたれた。10月7日には、玉川学園で歓迎会が催され、400人の児童生徒によるフィンランド語と日本語によるフィンランドの国歌で迎えられた。翌朝、大学・高等部の木曜礼拝における「日本と私」と題したスピーチでは、最後に、中部フィンランドの女子中学生の間にできた「ヨシロー会」³に、是非日本の絵葉書を送り日本に対する関心が深まるようきっかけを提供してほしいと伝えた。このほか、フィンランド人宣教師らによって創設された大岡山ルーテル教会付属幼稚園、鎌倉の川端康成氏宅、日本ペンクラブにも訪問、また、箱根、京都、奈良、大阪を観光し秋の日本を楽しんだ。宿泊先のホテルでフィンランドとの貿易に携わる東洋綿花、岩井産業など商社4社による歓迎レセプションや、日本フィンランド協会のお茶会に招かれ、大阪市の経済局からのもてなしを受けたこともあつた（毎日新聞1953年10月13日）。帰京後、当時の岡崎外務大臣から、日本文化研究と紹介の功労をたたえる表彰状と真珠の首飾りが、また、東京都春副知事から羽織が贈られている（東京新聞1953年11月2日）。

日本訪問の目的の一つは、フィンランドの碩学比較言語学者のラムステッド（G. John Ramstedt 1873～1950、初代駐日代理公使）の著書を早稲田大学へ寄贈することであつた。この寄贈は、1952年馬場重徳（文部省大学学術局学術課文部事務官）が、欧州への文献学と専門図書館学とを合わせた学術交流利用に関する研究旅行の出発に先立って、当時の早稲田大学の図書館長岡村千曳から「欧州に行ったら何か特徴のある蒐集を早稲田の為にしてください」と言われたことにさかのぼる。ラムステッドの著作を日本へ送るにあたり、それらを管理するフィン・ウゴル協会との交渉を試みたが、難航し諦めかけていたところをケラ

³ 前述の公使の従者、要芳郎のことである。ヘルシンキ工科大学に通う彼は、フィンランド語をケラヴオリに習い、流暢であつたという。

ヴオリが軌道にのせたという⁴。こうしたいきさつから、ラムステッドの著作 17 冊は、ケラヴオリの手で寄贈され、ラムステッド文庫と名づけられた。彼女は自著 3 冊もそれに添えた。馬場はこのケラヴオリによる寄贈に関し、「早稲田にラムステッド文庫がそうした人の心のこもった援助で与えられたことはいろいろな意味で心楽しいことである」(馬場 1954 : 35) と振り返る。このとき、ケラヴオリは、早稲田の関係者から「フィンランド語の講座を開講したら是非教えに来てほしい」と言われ、日本におけるフィンランド熱の高さに驚いたという (Helsingin Sanomat 1953.11.28)。

日本での 5 週間は、歓迎会や学校訪問の他、テレビ局や新聞社から取材依頼が相次ぐなど、多忙な日々の中で、和歌に詠まれている日本の心や風物に触れながら、11 月 3 日に日本を発った。帰国後、新聞社に送った手記では、800 万都市東京の交通機関は驚くほど混んでおり、遠出をする際は常にガイド付きで外国要人用の車が用意されたと振り返る。また、「もし女王であってもこれ以上の扱いは受けなかった」(Helsingin Sanomat 1953.11.28) と振り返っていることから、当時の歓待ぶりが想像されよう。

訪日前、日本語力に不安を覗かせていたが、歓迎会や新聞記者とのインタビューの場では、ことわざや和歌の知識を随所で披露した。箱根旅行の後、「日光を見るまでは結構といえぬ」をもじり、「私にはやっぱり、箱根の温泉気分のほうが日光より結構」と言い、奈良では、「天の原ふりさけみれば…」とすらすら口ずさんで周囲の人たちを驚かせた (東京新聞 1953 年 11 月 2 日)。

また、玉川学園で行ったスピーチでは、「私は毎日毎日をお祝いのような気持ちで楽しく過ごしています。新しい日本の家、初めて見る日本の果物など、毎日面白く楽しく暮らしているうちにあの浦島太郎のように家へ帰るのを忘れはしないかと心配です。どうか私を一ヶ月たったらフィンランドに帰してください。お願いします。」とお伽話の引用も忘れなかった。

ケラヴオリは、フィンランド紙 *Uusi Suomi* (新生フィンランド) の特派員としての特権を与えられ、同紙への「日本旅行記」の連載が決まっていたこともあり、約 1 ヶ月あまりの滞在でノートは十数冊にのぼっていたという。「日本旅行記」は、同年 10 月 6 日から翌年 1 月 19 日まで 8 回にわたり連載された。一方、日本にも日本印象記が東京新聞に送られ、「故国に帰った今も夢見る日本 羽織姿でお書初め、ケ夫人本社に寄書 日本通で引っ張りダコ」(東京新聞 1954 年 1 月 17 日朝刊) という記事の中で紹介された。

2. 4 和歌と文化行事

和歌への情熱はその後とも衰えを見せることなく、宮中の歌会始には、1956 年、68 歳の年から 10 数年にわたり自作の和歌を送り続けた。歌会始めに応募した詠進歌 12 句は、1967 年に出版された「桜の花」の第 2 版に加えられた。この和歌への情熱に対し、日本とフィンランドの双方から高い評価を受けた。日本では、ケラヴオリが病床にあることを知った宮内庁御歌所筆典職が、夫人の短歌に寄せる情熱に感激し、それまでの努力をたたえた和歌を詠み、1966 年、その色紙が NHK に託され、在フィンランド日本大使館を通じて送られた (毎日新聞 1966 年 8 月 17 日)。フィンランドでは、ケラヴオリの短歌に対する情熱と、遠く離れた日本とフィンランドの二国間の架け橋となったその努力に敬意を表すべく、1973 年に「北極の短歌」という番組が製作され、テレビで放映された (Katso 1972)。

和歌以外にも能や歌舞伎など伝統芸能を紹介する記事が新聞や雑誌に掲載された。日本文化紹介を目的としたテレビやラジオでのインタビューや大学での講演活動などは、1967 年までにすでに大小あわせて 40

⁴ 馬場は、北ヨーロッパを回ったが、成果は芳しくなかった。フィンランドに着いたときに、言語学者ラムステッドのことを思い出し、故ラムステッド夫人を通じ、フィン・ウゴル協会に寄贈を依頼した。馬場は、日本とフィンランドの関係、特に、早稲田の講師をしていた森本覚丹がフィンランドの国民的叙事詩カレワラを最初に翻訳した事実をあげるなど、日本とフィンランドの関係に一役担っていることなどを強調したが、寄贈は通常世界的に権威のある機関に対してだけ行われるもので、当時、早稲田大学はあまりフィンランドでは知られていないからというような理由で難航していた。

件にのぼる。日本公使館の文化行事への協力や、フィンランドでの日本関係の催し物に中心的な役割を果たした。例を挙げると、公使夫人と『生け花』(WSOY)を出版し、32の作品を掲載しフィンランド語で解説した。ブロードウェイのヒット舞台劇「8月15夜の茶屋」が1956年10月18日、フィンランド東部のユバスキュラの劇場で上演された際には、演出から舞台まですべてフィンランド人の手で準備し演じられたこの劇の振り付けから考証まで一切をケラヴオリが担当した。「日本の夕べ」という番組が1957年1月27日に放映され、日本の童謡やお伽話、和歌や生け花が披露されたが、この番組を監修したのもケラヴオリであった。

一方、フィンランド人向けの日本語の教科書の作成や辞書の作成に対し、来日時に強い意欲を見せていたが(東京新聞1953年11月2日)、原稿は準備されたものの、出版されることはなかった。ケラヴオリは、一連の活動が評価され、1972年11月京都の都ホテルで開催された日本研究国際会議に日本ペンクラブから招聘されたが⁵、既に病床にあり出席は断念した。

3. ヘルシンキ大学客員教授桑木務

大戦下のフィンランドで日本語を教えた桑木の活動についてみてみよう。桑木務(1913~2000)は、1939年から日独交換学生(文部省在外研究委員)としてドイツで哲学を学び、1941年からヘルシンキ大学の客員教授として日本思想、日本語を教えた。帰国後は、1949年から共立女子大学、1952年より中央大学で哲学、倫理学を講じた。一方、1949年には、尾崎義(後述)らとともに北欧文化協会を設立し、初代会長(1949~56)を務めた。桑木は、3年以上におよぶフィンランドでの滞在経験から、フィンランドや北欧に関し、多くの著述を残している。その数は、中央大学退職時に公開された著作目録によると、専門の「哲学・倫理学関係」では、著書・訳書が19点、単行本、辞典に含まれたものが16点、主な雑誌・新聞への寄稿文・論述、放送が約100点確認できる。これに対し、「北欧文化関係」では、著書が1点、単行本、辞典に含まれたものが32点、主な雑誌・新聞への寄稿文・論述、放送が25点、総計58点が記されている。ただし、筆者が現物を有する北欧関係のものがこの目録に掲載されていないことから、実際にはこの数より多いと思われる。著作目録を、専門と北欧文化関係に分けていること自体が桑木の活動を物語るが、本業のかたわら行われたフィンランドに関する著述にこれほど精力的に取り組み成果を残したのは、この時期、桑木のほかに類を見ない。

雑誌も『婦人之友』から『學燈』に至るまで、広い読者層に発信されていたこと、退職時の1983年にも執筆されており、長きにわたりフィンランドと関わっていたこと、その内容から桑木はフィンランド語をよく理解し、文学や歴史など深い愛着と尊敬をもって紹介していたことがわかる。また、テレビやラジオを通じた広報活動も早くから行っていた。高井泉(北欧文化協会3代目理事長)は次の様に回想する。

「フィンランドのカレワラ祭は、初代桑木理事長や森本理事など大変なご努力によって始められ、「今は当協会の大事な年中行事の一つとなり、テレビやラジオなどのマスコミを通じてフィンランドの文化を広くわがくに紹介され、このごろ二月が近づくと各方面から電話や手紙でその内容の問い合わせが殺到するほどわがくにカレワラの名が普及してきたことは、桑木先生の絶大なご功績の賜ものであることを忘れてはなりません。」

桑木は、このように、日本の大学で哲学を教える傍ら、北欧文化協会を設立し、詩や文学の翻訳、執筆、講演を通じ北欧文化を紹介した。文化交流のパイオニアとしての活動が評価され、フィンランド政府から

⁵ この日本研究国際会議には、ヨーロッパからは15カ国67名が参加した。この集いを契機にヨーロッパ日本研究協会が組織された。

1958年ライオン騎士第一級勲章を授与された。聞き取り調査や遺稿集に寄せられた声によると、その活動は、北欧文化協会の毎月の例会の運営をはじめ、フィンランドに渡航する者への情報提供、自宅でのフィンランド語の教授など、多岐に渡る。本稿において、特に注目したい点は、戦中のヘルシンキ大学の多彩な教え子たちと帰国後も書簡を通じ双方の情報を伝えあい、桑木がフィンランドを再訪した折にも、フィンランドのメディアを通じてメッセージを送るなど、行き来が不自由であった時代にフィンランドにおける対日文化活動にも声援を送っていたことである。こうした日本での桑木の活動は、フィンランドで日本文化活動を行うケラヴオリにも刺激を与えたことであろう。

4. 日本語教師と学習者

ケラヴオリの活動には、桑木をはじめとした多くの日本人の協力があつたことを見てきた。また、桑木の日本での活動がケラヴオリに支えられるとともに、彼女の活動への原動力となっていたであろうことも十分に推測される。では、なぜ、彼女の活動が日本で好意的に受け止められ注目されたのか、その理由について、活動内容と当時の日本の社会状況という点から探る。また、同時代にはその他にもフィンランドに関する活動は行われていた。日本語教師と学習者という立場からスタートした二人の活動の特徴を、これらとの比較してみる。

4. 1 ケラヴオリの活動の意味

すでに見てきたように、来日時には一挙一動が取材され、来日前の1951年から1964年まで、一般紙や雑誌でも彼女の活動について報じている。「ヘルシンキの恩人を招く」(東京新聞 1953年2月27日)「ヘルシンキのおばさんが来る 日本の秋をたずねて」(同年9月12日)という見出しの記事の中で、彼女の功績として「わが国のすぐれた文化」を紹介していること、「日本には古代からすぐれた文化があることを示すもの」として、フィンランドの新聞の書評も紹介している。

ケラヴオリの活動の紹介が集中している1950年代はじめの日本は、敗戦の混乱から回復しつつあつたとはいえ、主権を取り戻したばかりの不安定な社会情勢の中にあつた。そんな中、ケラヴオリが紹介したのは、敗戦をひきずる日本ではなく、短歌を通じた古代から続く歴史や美意識や細やかな心情であつた。こうした日本紹介は、独立を回復したばかりの日本で、古来から持つよきものを日本人に再認識させ、自信や希望を与える力を持っていたと思われる。ケラヴオリの活動は、当時の日本人に自文化への自信を取戻し、激励することとなつたと推測できよう。すなわ、戦前、桑木がヘルシンキ大学で日本文化の神髄として伝えた内容が、民間外交家のケラヴオリによって当時の日本人に再認識させるという形で再び、当時の人々に伝えられ、その心に浸透していったのではないだろうか。

4. 2 同時代の北欧紹介の意味

ケラヴオリの活動をはじめ、北欧を日本に紹介する意味はどのようなものであつたのだろうか。日々の生活にも困窮する占領下の日本で、アメリカの情報ではなく、日本からはるか離れたフィンランドや北欧の情報はなぜ必要とされていたのだろうか。一連の活動が注目された背景について、当時の社会状況から考えてみたい。

戦前・戦中の欧州に駐在したジャーナリストの中には、戦後北欧について紹介をした者がいる。その一人である朝日新聞社の特派員としてストックホルムに駐在した渡辺紳一郎(1900~1978)は、次のように述べる。

「スウェーデンは、民主主義社会の理想郷であり、文化的一等国である。世界一を好むアメリカもスウェ

デンのノーベル賞の権威を認め、敢へてこれと競ふことをしない。(…)私はストックホルムに朝日新聞特派員として、この国に在ること戦争中の満四カ年、スウェデンの国と人を見て、聞きしに優る地上の理想境であると、つくづく感じたが、今の惨めな日本の読者に、飽食暖衣とか、鼓腹撃壤とかの結構な話をして、度胆を抜くのが私の本意ではない。現代の理想境であるスウェデンも、かつては軍国主義的国家であり、政治的に一等国だったのであるが、戦争に敗けて海外の植民地を皆失って、三等国に転げ落ち、インフレで産業振るはず、国民は食ふや食はずのどん底に陥ったのである。しかるに、學術の奨励と社会主義の実行とによつて、文化的一等国として生れかへた。このことこそは、われわれにとつて、日本再建に当り、今日の方針を決める上に、大きな暗示と教訓を与へるものであると思ふ。貧しい者がよその金持の懐ろ勘定をして羨しがめるのではなく、スウェデンが、どうして立ち直つたかといふ話が、われわれに必要なのではなからうか。」

「民主主義社会」「地上・現代の理想郷」「文化的一等国に生まれ変わった」国々を研究し「日本再建」の目標にしようという発想は、北欧文化協会の設立の理念でもあった。

桑木は、雑誌『北欧』(1973)に、17編からなる「特集フィンランド」を取りまとめ、冒頭の「フィンランド特集号に寄せて」で、戦後の日本の風潮として次のように記している。

「戦後の日本の風潮は、自らを5等国?と卑下する余り、従来の思いあがった大国主義から転じて、小国にもそれぞれの価値を認めた親しい仲間意識をもち、また平和主義の見地からスイスやスウェーデンを、福祉国家を標榜してイギリスや北欧諸国をひとは盛んに研究しだした。」

占領下および冷戦下において、アメリカ的価値観や文化が一気に浸透する日本では、政府の外交政策に対抗する野党勢力が、それに対抗する道具として北欧など中立国をとりあげた。こうした状況の中、北欧の価値観や社会に関する知識が重要性を帯び⁶、ケラヴオリや桑木の活動は歓迎され、積極的に報じられていたものと推測される。

4. 3 他の活動との比較

社会的な要求という追い風を受けながら、フィンランドに関する著作や活動は、桑木やケラヴオリだけでなく、ほかの者によつても精力的に展開された。最後に、この中で桑木らの活動は他とどのような点で異なるのか探してみたい。

フィンランドに関する著作は、戦後間もない1947年ごろから相次いだ。1947年に出版された『北欧通信』(斎藤正躬著、月曜書房)を皮切りに、北欧文化叢書第一集『フィンランドの文化』(1951年、北欧文化協会編、全85頁)が、言語に関しては、1952年にフィンランド語の学習書『フィンランド語四週間』(尾崎義著、大学書林)が出版された。これは、日本ではじめてのフィンランド語文法書であり、言語学者小泉保による『フィンランド語文法読本』(大学書林1983)が出版されるまで、日本語による唯一の本格的な文法書であった。辞書に関しては、少し時代が下るが、1963年に『フィンランド語辞典』(日洪文化協会)が、1965年には『ローマ字フィン・日辞典』(日本フィン・ウゴル協会)が、1966年には『フィンランド語小辞典』(日本フィン・ウゴル協会)が出版された。

一方、歴史や社会を紹介する書は、1951年の『独立への苦悶—フィンランドの歴史—』(斎藤正躬著、岩波新書)を皮切りに始まった。1950年代は、世界各地を文学や地理、社会を紹介する百科全書や児童向けの図書が編纂されるようになった。『世界現勢事典』(東京堂、1952)、『世界文化地理体系』(平凡社、1954)

6 吉武信彦(2003:94)

『世界詩人全集』(河出書房、1955)『世界のこども』(平凡社、1955)『世界名詩集体系』(平凡社、1958)『少年少女世界文学全集』(1958)などのシリーズの中で、北欧についても詳細に紹介された。

語学書から百科全書に至る一連の執筆は、戦前の欧州に滞在した者が行った。桑木以外では、文法書はスウェーデン語専門の外交官尾崎義が、辞書は在野の研究者ハンガリー事情に詳しい今岡十一郎が作成した。フィンランドの歴史や社会情勢に関する著作は戦前の欧州に滞在した同盟通信社特派員斎藤正躬によるものである。

『フィンランド語四週間』を執筆した尾崎義(1903~1969)は、スウェーデンを中心に22年間欧州に滞在した外交官であった。在フィンランド日本大使館には1963年に着任しているが、文法書はその前に著したのである。外務省退職後は、創設されたばかりの東海大学の北欧文学科の教壇に立つが翌年他界した。

日本ではじめてのフィンランド語辞典は、今岡十一郎(1888~1973)が編纂した。今岡は、1922年より1931年までハンガリーに滞在し、ハンガリーの言語や歴史を研究するかたわら日本語を教えた。今岡はハンガリーに関する在野の研究者として知られるが、彼は、フィンランド語辞典を続けて三冊作成している。一冊目の『フィンランド語辞典』(1963、日洪文化協会)は、約2万語を収録する696頁に及ぶ大著である。『ローマ字フィン・日辞典』(1965、日本フィン・ウゴル協会)は、フィンランド人日本語学習者を念頭に作成されたものであった。ヘルシンキ大学で小泉保氏のもと日本語を学ぶ約50人の学生の声に応えたものだという。最後に、『フィンランド語小辞典』(1966、日本フィン・ウゴル協会)は、1万語を収録する全202頁の辞書である。前書きには、今岡が専門とする、フィン・ウゴル語群とその祖語について紹介しているが、巻末には、身近な単語集やフィンランドの生活情報とともに、フィンランドを訪れる日本人向けに16の場面の簡単な会話例も付され、実用をめざしたものである。出版費用の一部は文部省科学研究成果刊行費補助金を受けているが、そのほとんどは、今岡の自費によって賄われた。

『北欧通信』(1947、月曜書房)、『独立への苦悶—フィンランドの歴史—』(1951、岩波書店)を執筆したのは、戦前のヨーロッパに駐在した斎藤正躬(1911~1967)である。彼は、同盟通信社特派員として、リスボンやベルリンを経て、1941年からストックホルムに駐在し、1946年に帰国した。彼のフィンランドや北欧に関する執筆は、フィンランドの歴史や国情に関する読み物から随筆や子供向けの読み物にいたるまで幅広く、1947年に始まり1950年代前半までに集中する。まだ日本が占領下にある時代に出版された『独立への苦悶』は、占領下の日本で講和条約の締結に向け、全面講和か単独講和かをめぐり意見が対立する中で生まれたものであった。当時、岩波書店は、全面講和論の論陣を組むため、スイス、トルコとともに、フィンランドの歴史を取り上げる三部作を企画し、その一つ、フィンランドの独立史について、斎藤が担当したのであった⁷。ちなみに、斎藤はその後ポーランドで日本語教師をつとめている。

彼らの著作は、それぞれの専門を生かした大作であり、いずれも、戦後はじめてのものであった。執筆にはフィンランド人の協力があつたという。しかし、尾崎義はまもなく他界し、斎藤も今岡もフィンランドに関する活動は途絶えた。桑木は、ケラヴオリから随時あらたなフィンランド情報を得、あらたな翻訳や著述を続け、また、ケラヴオリにも情報を提供して活動を支えた。かつて師弟関係にあつた二人は、惜しみなく情報を提供し意見を述べ合いながら、互いに研鑽を積んでいったのである。

5. 日本語のクラスが育んだ民間草の根交流—まとめにかえて

大戦下のフィンランドで日本語を学んだケラヴオリによる日本文化を紹介する活動が注目された要因について、彼女の活動内容と社会背景、日本語の教師と学習者という点から指摘した。当時は、西洋の女性が日本の詩歌を翻訳し文化を紹介するということが珍しい時期であった。しかも、彼女が紹介する日本文化とは、敗戦を引きずる日本ではなく、古来から持つ繊細な美意識など古き良き時代の精神や文化の

⁷ 百瀬宏先生(国際政治学、津田塾大学名誉教授)のご教示による。

神髓であり、来日中に日本人にそれを語りかけ続けた。遠く離れたヨーロッパの一角で行う彼女の活動や日本語で熱く語るその姿は、戦後の復興期の日本に希望の光として映ったであろうことは想像にかたくない。特に、占領下及び東西の冷戦下において日本にアメリカ的価値観が一気に浸透する中、それに対抗するものとして北欧の価値観に注目する向きもあった。当時の日本には、その内容と時期から判断し、ケラヴオリの活動を迎え入れる土壌があったと思われる。

一方、大戦下のフィンランドで日本思想や日本語を教えた桑木は、戦後間もない1949年に北欧文化協会を立ち上げ、精力的な活動を展開した。フィンランド関連の書物について言えば、執筆者は他にもいた。戦前の欧州に滞在した外交官やジャーナリスト、在野の研究者らである。彼等はそれぞれの専門領域で大きな成果を残した。しかし、その活動時期は限定されたものであった。それに対し、桑木らの活動は、草創期の草の根の両国の民間交流を促進し、長い間継続された。ケラヴオリと日本語の出会いは、退職後の第二の人生にさしかかったころであった。初めての著作が62才という時期であり、その後生涯にわたり活動に奔走したアマチュアの民間活動家である。いわゆる知日家として知られる学者たちのように、制度の中で体系的な訓練を受けたわけではなかった。その成果は、学会や研究会など専門家の間で共有されたり、発信されたりしたわけではなかった。第二の人生という、時間的にも融通の利く、しかも、自由な立場からの発信であった。一方、桑木も30歳の年にヘルシンキ大学に着任し、帰国後、大学教員として多忙な時間を過ごす中、本務とは別に北欧を紹介する活動に多くの力を注ぎ、生涯を通じてフィンランドや北欧に関する活動を続けた。こうした草の根の民間交流は、1978年の文化協定が締結される前に展開された。これを支えた国境を越えた師弟関係は、もとはと言えば、海外で行われた日本語のクラスの中で生まれたものであった。

組織に属することのない元日本語学習者が元教師の支援をうけながら精力的に活動を展開したという事実は、大戦下に開講された日本語講座の成果の一つとして、その内容を知る重要な手がかりとなるものである。

参考文献

- 小川誉子美 (2001) 「フィンランドにおける日本語講座の黎明期(1938-45年)に関わった人々-G. J. ラムステッド、桑木務、M. ケラヴオリの功績を中心に-」 『日本語教育』 109 日本語教育学会
- 小川誉子美 (2006) 「大戦下日本語学習者の活動—フィンランドの知日家 M. ケラヴオリの場合—」 『総合学術学会誌』 第4号、日本総合学術学会
- 小川誉子美 (2010) 『欧州における戦前の日本語講座—実態と背景』 風間書房
- 小川誉子美 (2019) 「日本におけるフィンランドの紹介—戦後20年間の活動の内容と意義—」 『日本とフィンランドの出会いと繋がり—100年にわたる関係史—』 大学書林 (印刷中)
- 桑木務 (1981) 『大戦下の欧州留学生活—ある日独交換学生の回想』 中央公論社
- 桑木務 (1984) 「桑木務教授略年譜及び著作目録」 『紀要』 第30号、中央大学文学部哲学科
- 床枝高造 (編) (1973) 『北欧』 第4号、北欧文化通信社
- 馬場重徳(1954)「ラムステッド文庫とケラヴオリさん」 『早稲田学報』 新年号 637号
- 北欧文化協会(編) (2002) 『よき人を偲ぶ 故桑木務氏追悼文集』 私家版
- 吉武信彦 (2003) 『日本人は北欧から何を学んだか』 新評論
- 渡辺紳一郎 (1947) 『スウェーデンの歴史を散歩する』 朝日新聞社